

2009年度 卒業論文講評

2010年2月 小関 隆志

新井 歩「経済的理由による教育格差」

阿部彩『子どもの貧困』（岩波新書）をはじめ、近年は子どもの貧困に注目が集まっています。当然のことながら「貧困」は大人だけの問題ではなく、子どもにも連鎖し、子どもの将来に暗い影を投げかけます。その影の一つが、教育格差です。

中学までの義務教育だけでは、とても、まともな就職は期待できません。高校卒でも就職難が深刻な時代です。しかし、高校・大学にかかる教育費はかなりの親の負担です。さらに、上位の大学や私学をめざそうとすれば、予備校などの費用もかかります。親の経済力によって子どもの将来が大きく左右されるのは、その子どもにとってだけでなく、社会全体にとっても、何とも不幸なことではないでしょうか。

新井さんは「教育格差」をテーマに掲げていますが、その主な内容は、貧困家庭の子どもに対する経済支援のあり方です。教育格差は無論、貧困層だけの問題ではありませんが、教育費を充分負担できない貧困層（生活保護世帯など）に矛盾が集中して現れるので、順当な問題の設定の仕方といえるでしょう。

日本は欧米諸国と異なり、教育費を公的に負担する制度が十分に整っていません。そのため、本論文の第2章・第3章で取り上げている政府の支援策は必ずしも教育に特化したものではなく、子育てや生活全般にかかる支援策を取り上げざるを得ませんでした。第4章で紹介している欧米諸国の充実した奨学金制度と比較すれば、その差は歴然です。

論文の企画段階では現地調査も検討しましたが、貧困層の人たちや福祉事務所などへの直接のアクセスは結局断念し、統計と政策を中心に据えました。生の声を盛り込めなかったのは残念なところですが、多くの文献を参照して、しっかりと論文を書けました。

明治大学で学ぶことのできた学生さんは大変幸せですが、経済的理由から私学をあきらめて国公立大学を選んだり、大学への進学をあきらめて就職の道を選んだ人も少なからずいます。そのことを今後も忘れずにいてほしいですね。